安部公房「鉛の卵」論

――発見される〈境界〉

大野祐仁

一、はじめに

一九五七年一〇月四日、ソ連が人類史上初となる人工衛星の打ち上げに成功した。一九五五年、アメリカとソ連はともに国際地球観測年[1]に合わせた人工衛星の打ち上げを宣言していたのだが、先にソ連が打ち上げを成功させたことは世界中に衝撃を与えた[2]。メディアでも盛んに「宇宙時代」の到来が報道されたこと[3]からも、その余波が日本に与えた影響の大きさがうかがえる。

新時代を予覚させるこのような出来事とほぼ同時期に、安部公房「鉛の卵」（『群像』一九五七・一一）が発表された。本作のあらすじは次のようなものだ。卵型の冬眠器に乗り込み、百年後の未来を目指した科学者の「古代人」が、予期せぬ機器の故障により八〇万年後の世界で目覚めることになる。そこでは光合成が可能になり食事を一切とらない「緑色人」が繁栄しており、「どれい族」を使役することで不自由のない生活を送っている。空腹の極みに達した古代人は冬眠器の前で非常食を食べるが、緑色人にとっての犯罪が摂食であったため、「どれい街」に追放される。だが、実際には「どれい族」こそが「本物の現代人」であり、緑色人は「博物館」に保護されている存在に過ぎなかったのである。

本作発表の直前に行われた座談会[4]のなかで「ほんとうの意味の新しいサイエンス・フイクションをやってみたいな」と発言していたように、SF[5]に並々ならぬ意欲を見せていた安部ではあったが、本作はむしろ否定的な評価を

得る[6]ことになった。とりわけ荒正人[7]は辛辣で、「作者のねらいは、「古代人」をかこんだ「未来人」の戸惑いやら驚きやらを軽い気持で扱ったものか。現代社会への批判も未来の予言もない」と述べている。

確かに、本作の演出は読者の意表をつくものではある。現在の人類と全く異なる姿形の緑色人を八〇万年後の人類であるかのように思わせておきながら、最後に外見の変わらない「本物の現代人」が登場するという劇的な結末は、初読者に強い印象を残すだろう。だが、そこに本作の主眼があるとするならば、意外性を重視した娯楽小説として、再読に堪えるものではないという判断に直結する。

しかし、作品を丁寧に読み解いていけば、本作が荒のいうような「軽い気持」によって成立したのではなく、被支配者の抵抗を描いた作品であることが見えてくる。そこにはおそらく、目まぐるしく変化する同時代の社会状況に対する安部の問題意識も潜在していると考えられる。

本論では、作中の緑色人のありように着目し、支配者としての現代人と結ばれている関係の分析を通して、緑色人の抵抗の姿勢を検討する。さらに、作中で強調される現代人と緑色人との隔たりを象徴的に示す「高い塀」の持つ意味について考察する。以上の分析を通して、安部が同時代にとりわけ関心を抱いていた東欧問題との関係にも目を向けつつ、「鉛の卵」の持つ可能性を検討する。なお、本論における「鉛の卵」の本文引用は全て初出に拠った。また引用に際し、断りのないルビなどは全て原文の通りである。

二、〈抵抗〉する緑色人

本作の分析に際してまず注目したいのが、緑色人についてである。作中において緑色人は、肉体のみならず精神的にも植物的な存在として描かれている。労働を嫌い、「老若男女をとわず、ひどく賭け事がすきで、なんでも賭けずにはいられない」性質の彼らからは、怠惰で無気力な印象を受ける。しかし、おそらく緑色人はそのような性質をはじめから有しているのではない。

そのことを確認するために、緑色人のケリが祖先について語る場面に着目する。「ひどい大飢饉の時代があつたらしい」と切り出すケリは、続けて次のように述べる。

「〔略〕その時代のことをしるした石碑が残つています よ。〔略〕それにはこう書いてあるんです。――餓死した死体のなかには、胃袋のないものもあつた。胃袋が自分で自分を消化してしまつたのである。それでそういう死体は、ほかの死体よりもずつと生々としてみ

えた……」／〔略〕「それで？」／「いや、それだけです。あとは、消えていて、読めないのです。しかし、これだけでも、われわれの祖先が、ただ手をこまねいていたのではなく、餓死者の中から逆にすすんで生きる方法を発見したのだということが、十分にくみとれるではありませんか。〔略〕」

ここでケリは、緑色人の緑色人たる所以を「餓死者の中から逆にすすんで生きる方法を発見した」こと、すなわち逆境の中で生存するための方法を主体的に見つけ出したことだと主張している。緑色人の祖先は「人間改造」、つまり「血液の一部を、葉緑素にかえてみた」結果光合成が可能となり、飢饉を克服した。そして「飢饉状態は人間が変異しやすくなつているから、この効果が人間に定着して、おまけに遺伝しはじめた」ことで緑色人の系統が形成されたのだという。科学技術によって飢饉を克服した祖先の姿勢が誇らしげに述べられている。続けて、現代の緑色人と「どれい族」との関係が次のように語られる。

「一方、思いきつて手術をうけるだけの勇気のなかつたもの、あるいは金がなかつたもの、あるいは機会にめぐまれなかつた未開人種、もしくはその手術を自分に定着しえなかつた不適格者などは、少い食糧のあさましい奪いあいに狂奔するなかで、次々と亡んでいつた。見るに見かねて、その一部を保護し、家禽代りに育ててやつたのが、現在のどれい族というわけです。〔略〕」

ここでは緑色人が「どれい族」を「みじめ」な存在として認識する背景が説明されている。しかし、このようなケリの歴史観は恣意的なものにすぎない。というのも「ひどい大飢饉の時代」について「その時代のことをしるした石碑」には「餓死した死体のなかには、胃袋のないものもあつた。胃袋が自分で自分を消化してしまつたのである。それでそういう死体は、他の死体よりもずつと生々としてみえた」としか書かれていないからだ。ケリの語る歴史は「われわれはこう解釈しているんです」という言のとおり、多分に想像を盛り込んだものなのである。ケリの語りに「そこで――たぶん祖先は医者か生物学者だつたのでしようが――人間改造に着手したわけだ」「むろん、人工的に出来たことは、ほんのちよつとした、きつかけ程度のことだつたにちがいない」「こうして、その種族だけが、大飢饉時代にも打ち負かされることなく、逆にどんどん進化して、ついにわれわれ現代人にまで行きついたというわけでしよう」といった類推表現が頻出するのはその証だろう。緑色

人の言動について現代人が「私たちのことを、どれい族だなどと、彼らは勝手にきめていますけど、まつたく奇妙で、しかもユーモラスな妄想をおこしたものですね」と述べているのも、こういった背景を指してのことだと考えられる。

ただし、緑色人の歴史が全くの「妄想」であるとは言いきれない。現代人が「あの連中のおしやべりにも、かなりの真実はありますよ」と述べるように、一定の事実が含まれてもいる。おそらく緑色人が光合成を可能にしたという過去は事実と見做しうるものである。作中の現代人が緑色人を「植物人」とも呼称していること、古代人の「植物的因子」や「植物化傾向」が調査されていることがその根拠として挙げられるだろう。それでは、緑色人の語る歴史のどこに改竄が見られるのだろうか。

先に結論を述べるならば、緑色人はかつて現代人に捕食されていたのである。大飢饉の時代にあって緑色人の祖先は食料問題から解放された存在ではあったが、現代人の祖先はそれを克服できなかった。その代わり、緑色人を捕食することで生き延び、ついに緑色人を支配することになったのである。このような作品解釈が成立する証拠として、第一に古代人の次のような独白が挙げられる。

あの、さつきのペカという娘、あれならちよつと料理すれば食えそうだ。食つても罪にならないのなら、食つてやろうか。一人食えば、覚悟もきまり、次々と、食えるようになるかもしれない。そうなつてしまえば、ここの生活も、まんざらではないかもしれないな。

古代人は非常食が底をついた後の食料問題について、緑色人を食べることで解決しようと考える。「ペカという娘」は「果実の緑」を備えた緑色人で、空腹の古代人には「つぶすと、甘い汁が、こぼれ出してきそう」に見え、「追いついて、ひつぺがして、かぶりつきたいような気持」を喚起させるのだが、こういった古代人のカニバリズム的志向は、緑色人が捕食される存在であることを示唆している。つまり、緑色人と古代人とでは、少なくとも食う／食われるという関係において一方的な力関係が成立するのであり、緑色人は被捕食者でしかあり得ないのである。

そして現代人の外見が「寸分ちがわぬ、古代の人間そのまま」である以上、現代人もまた古代人同様、緑色人を捕食しうる存在であることは容易に想像できる。物語の現在における保護と被保護の関係は、かつては捕食／被捕食の関係だったのである。

第二の証拠として、緑色人の唯一の犯罪が挙げられる。古代人は冬眠器の前で食事をとったために緑色人街から追

放されることとなった。「食べること……それがこの国での、追放にあたいする、唯一の、そして最大の犯罪だつたのだ」と説明される通りだが、緑色人はすでに胃や唇が退化しており、食事による栄養補給は不可能である。ならばこの犯罪は、少なくとも緑色人だけの居住区では起こり得ないはずである。にもかかわらずこのような犯罪が想定されているのは、捕食を行う存在、すなわち現代人と緑色人とを区別するためだと考えられる。つまり、緑色人は現代人およびそれに準ずる存在、緑色人を捕食する存在を緑色人街から排除するために、自身は犯すことのない罪を設定しているのである。ケリがこの犯罪について「もうながらく、そんな先例はありません。まあ、伝説に残つているだけだろうな」と述べているのも、この罪を犯すのが緑色人だとは想定されていないことの証左だといえるだろう。

第三には、現代人に対する緑色人の態度が挙げられる。古代人が緑色人街から追放される場面を引用する。

やがて、人間たちは、古代人をとりかこむと、威嚇の身振りで腕をつきだし、喉をならしながら、博物館の中へとおしこんでいき、〔略〕さらに奥へと追いたてるのだ。やがて、裏手に、やはり同じような大ホールがあり、扉があつたが、これは閉つていた。その閉つた扉のまえに、古代人を立たせ、ケリがなにか叫ぶと、それを合図に緑の人間たちはわれさきにと駈けだして、またたくうちにホールの中はからつぽになつている。

緑色人は古代人に対して「威嚇の身振り」を見せ、また現代人を待たずに「われさきにと」その場から逃げ出す。それまで友好的に接していた古代人、奴隷として扱っているはずの現代人に対する態度としては、かなり不自然に思える。ここには古代人および現代人に対する恐怖が垣間見える。それはかつて捕食者であった現代人への恐れと直接的に接続しているのだと考えられるだろう。

以上をまとめよう。緑色人は「人間改造」という科学技術によって光合成を可能にし、飢饉を乗り越える術を手に入れた。だがそれは労働や競争の目的を失わせた、いわば人類の植物化であり、現代人に食欲を喚起させる存在への変貌でもあった。飢饉を乗り越え、緑色人を捕食する必要がなくなった現代人は彼らを公園に「保存」することとなり、緑色人は現代人への恐怖を直接的に想起させる被捕食の歴史を隠蔽し、過去の誇りと被捕食の恐怖との板挟みの中、捏造された歴史観によって辛うじて生存している。いわば一種の自己防衛として歴史を書き換え、その歪んだ歴

史観を信奉しているのである。

このような態度は確かに消極的なものでもあるだろうが、弱者である緑色人が強大な支配者である現代人に対峙するために選ばざるをえなかった態度でもある。したがって、ここに緑色人の精一杯の抵抗のありようを見出すことこそが重要であろう。

三、「高い塀」の境界性

緑色人の現代人に対する抵抗は、そもそも何を担保としているのだろうか。ここで注目したいのは、祖先に意外なほどの関心を抱く緑色人の態度についてである。たとえば冬眠器の中の古代人が「はたしてわれわれ同様の人間的なものであるか、それとも、どれい族のごとき存在にすぎないものか」という点に関して「古代人が、現代人ほどの知性や文明は持ち合わせていないにしても、その本性においては、やはり自分たちに近いものであることを、おのれの正統性を主張するためにも、まず前提として認めざるをえなかつた」と語られている。八〇万年前の人類から正統に進化した存在として自身を位置づけるため、歴史上の正統な人類であることの証明のため、祖先たる古代人は「自分たちに近いもの」でなければならないのである。

しかし、こういった主張は彼らにとって、歴史の捏造を直視せざるを得ないという事態をも招きかねない。古代人の「で、歴史によりますと、あなたがたの祖先も、やはりピテカントロープスだということになつていますか?」という問いに対し「あたりがしんとな」り、「ケリが心もち声を固くして」「ピテカントロープスも、先祖の枝の一つではあつたようですね」と答える場面が象徴的だ。緑色人のぎこちない対応は、古代人に彼らの「歴史」を問われたことへの動揺をあらわしている。すでに確認した通り、彼らは自身の歴史を捏造しているのであった。それは現代人から身を守る防衛本能によるものでもあるのだが、それゆえに彼らは確固たる歴史の「正統性」を求めるのである。古代人が自身の祖先であるかどうかは、緑色人にとっていわば実存に関わる問題なのである。

このような意識が端的に示されるのが、次のような場面である。

「私は、断然、どれい族のところへ行きます。」／「行けやしませんよ。ほら、あの塀、いや、その向うにそびえている高い塀です。羽のはえた犬にでもならなきや、まず見込みありませんね。」／そういえば、まえから気になつていた塀である。なるほど、あの向うが

どれいの国なのか。しかし……と、ふと気にかかるのは……あの馬鹿でかい塀が、不規則にではあつたがあらゆる方向に、行く先々で行手をはばんでいたように思いだされ、小さな塀で迷路のように仕切られているため広々と感じられるとはいうものの、街全体が結局はその高い塀でとりかこまれているのではないかと、そんな気がしたことである。しかしまあ、あの向うがどれいの国だとすれば、なにかの錯覚だつたのだろう。／「でも、どこかに門があるでしよう。」／「まさか、お客さんを、表口からどれい族街に、追放するわけにもいきますまい。犯罪でもおかさないかぎりはね。」

ここには、「どれい族街」へと古代人が向かうことを徹底的に阻止する緑色人の姿がある。ケリが述べるのは、「高い塀」を物理的に乗り越えることの不可能性であり、「犯罪」の罰としての「追放」以外に「どれい族街」へ行く手段がないことである。こういった語りが示唆するのは、「高い塀」を越えること自体がすでに緑色人の範疇を逸脱する行為である、という彼らの認識だろう。自身の正統性を担保する古代人を「どれい族」と認めたくないが故に、古代人が「どれい族街」へ向かうことを阻むのである。だとするならば、緑色人の「高い塀」に対する認識はきわめて独特なものだと考えられる。

言うまでもなく「高い塀」は現代人が公園建設の際に設えたものだと考えられる。それ故に塀は被支配の象徴でもあるはずなのだが、緑色人にとってこの「高い塀」はむしろ「どれい族」と自身とを区別するものとして意味づけられている。緑色人は、現代人の労働によって建設された「高い塀」を、「どれい族」の「どれい族」たる所以だと規定している。このような「高い塀」への意識は、次のような場面に端的に示されているだろう。

当分は昼間も、どれい族の出入りを禁止しようかなどという意見もでたが、もし万一、機械の故障で卵が爆発するようなことでもあつたら、やはり後始末にどれいが居た方が便利だろうということで、その案はとりやめになつた。それくらいなら、夜も一般解放にしたらよかりそうなものだが、それでは自分たちが自由にふるまう時間を完全になくしてしまうことだし、それよりもなによりも、まず一般的治安ならびに秩序にかかわることだつたから、これだけは、なにをおいてもだんぜん守りぬかねばならぬ規律であつた。

「どれい族」の完全な「一般解放」が緑色人の「自由な時間」を奪うことがさりげなく語られている。これは先に

分析した現代人に対する緑色人の恐怖を示す一例でもあるのだが、ここで注目したいのは夜の「どれい族」の出入りが「一般的治安ならびに秩序にかかわること」ゆえに禁止されるべきであり、それが「なにをおいてもだんぜん守りぬかねばならぬ規律」であるということだ。ここでいう「規律」が「どれい族」の出入りに関するものである以上、彼らの重視する「秩序」とは、この「高い塀」の境界性と密接に関わっている。緑色人が現代人との接触を極端に忌避するのも、その交流が塀の境界性を侵犯する行為であるからに他ならない。緑色人は、現代人からの支配を意味するはずの「高い塀」をむしろ自身の誇りを担保するものとして位置づけ、「どれい族」を遠ざける防壁のようなものとしての積極的な価値を発見しているのである。

では、現代人はこの「高い塀」をどう捉えているか。言うまでもなく彼らにとっては「保存公園」の区画を示すものなのだが、それは同時に「後期地質時代人類の変種」を「保存」の対象として自身と区別する態度の象徴でもある。現代人は緑色人と接する古代人の動向を「人類の発達史をしらべる」ための「実験」として「観察」していたことをさりげなく明かすが[8]、それは緑色人を〈科学〉の名の下に収容する発想と共通のものであろう。確かに緑色人は現代人の厚遇を受け、何不自由なく生活しているように見えるが、環境さえ整えれば人間であっても「保存」してよいという発想がそこには潜在している。「保存公園」の入り口に添えられた「われらに多大の教育的価値をもつものなり」という文言はそれを象徴している。「高い塀」は緑色人を収容するための檻でもあるわけで、たとえ人間であっても「実験」の被験体として扱うことをためらわない現代人の倫理観の欠如を暴き出す装置としても機能しているのである。緑色人にとっては「どれい族」との区別によって自身の歴史を正当化するための物理的、精神的な砦であり、現代人にとっては「保存」という大義名分の下に人間を収容することを正当化する囲いである。こういった二つの意味が「高い塀」には付与されていると言えるだろう。

ただし、以上のような両義性が古代人の「高い塀」に対する認識をふまえてこそ読み取れるものだという点は押さえておくべきだろう。「高い塀」が「どれい族街」を囲っているのではなく、むしろ緑色人街を囲うものとして意味を反転させるありようは、「鉛の卵」が「高い塀」という〈境界〉を隔てて二つの世界の意味や位置を変容させる物語[9]であることを象徴している。この点において、古代人は重要な役割を担っている。

ここでさらに着目したいのが、「高い塀」の向こう側、「どれい族」の居住区を想像する古代人が、「どれいの国」という語を用いていることである。塀を隔てて二つの国がある、という認識は、「食べること……それがこの国での、追放にあたいする、唯一の、そして最大の犯罪だった」という語りが示すように、語り手にも共有されているものである。作品は緑色人が意識的かどうかにかかわらず、この「高い塀」がいわば〈国境〉として機能しうることを暗に示してもいるのである。続けて、このことが持つ意味を考えたい。

四、発見される〈境界〉

本作が〈境界〉をめぐる問題を扱っていることはすでに述べた。実はこういった発想には、同時代の安部の社会情勢への関心、とりわけ東欧問題への意識が関わっている可能性がある。そのことを、『東欧を行く――ハンガリア問題の背景』（大日本雄弁会講談社、一九五七・二）[10]をもとに検討する。

同時代において、東欧を取り巻く社会状況はきわめて不安定なものだった。第二次大戦中から戦後にかけて東欧諸国では社会主義革命がおこったが、その前提となっているのは伊東孝之[11]によれば一九四五年のヤルタ会談において「東欧におけるソ連の優越的地位を認めた」ことであり、それゆえに「大多数の東欧諸国においては、いわゆる社会主義革命は、国内的な発展の結果としてというよりも、こうした外的圧力の結果として起こった」のだという。以上の背景に加え、一九五三年のスターリンの死、そして一九五六年のスターリン批判が、同年のポーランドにおけるポズナン騒動および十月革命、そしてハンガリー動乱の原因[12]のひとつとなった。

このような状況の中、安部は新日本文学会および国民文化会議の代表としてチェコ作家大会に参加するため、一九五六年四月二三日から六月二四日の約二ヶ月間、チェコ、スロヴァキア、ルーマニアを中心に旅行した[13]。その成果として帰国後にいくつかの文章を発表した安部は、それらに加筆修正を行い、『東欧へ行く』にまとめたのである。この時期から安部が日本共産党への批判を公にしはじめたことはよく知られているが、ここでは安部が東欧体験を経て得た「国境病」という概念に注目したい。

「国境病」とは、安部が東欧旅行で体験した「意外なほどの民族主義」を説明する用語である。とりわけチェコ人の「ジプシーと関係があるように思われるのがおそろしくいや」だという「こだわり」や「ドイツ人みたいな田舎者

とくらべられてたまるかい」という「偏見」がその例として挙げられている。安部はその体験をふまえ、次のように述べる。

日本は海にかこまれていて国境がないから閉鎖的なのだと言われているが、私はむしろ反対であるような気がする。〔略〕国境のある民族は外国との往来が自由だから偏見がすくないなどという考えは、要するにコスモポリタンが頭の中ででっちあげた空想で、現実は逆に国境という怪物によってますます偏見が助長されるわけである。

地続きであるからこそ国境によって自己と他者とを区別する必要が生じ、それが国家や民族といった共同体意識を高めていくこととなり、それゆえに他民族への偏見が増強されていく、というメカニズムを安部は指摘する。続けて安部は、「国境病」がどのように発展していくかを述べる。

国境のある国の人々は、国境によって自己を限定する。彼らは自分を強く意識し、国境コンプレックスによって民族主義におちいりもするが、同時に苦しみも味うのだ。国境にとらわれながら、とらわれることによって逆に脱出をこころみる。〔略〕だから彼らのインターナショナリズムは根強くまた自覚的なのだ。

国境を意識することによって民族主義が生じるが、それを自ら克服することで「インターナショナリズム」が育まれる、という安部の発想の前提には「出発前に私をとらえていた偏見」すなわち「人民民主主義国は明るい平和な国です、みんな気持のよい人で、あたたかい歓迎をしてくれ、日本との友好を求めています」といった先入観が正されたという経験がある。「あの偏見があったればこそ、そこから脱けだすこともできたのだと思う。私は印象に極力抵抗した。抵抗したおかげで混乱した。混乱したおかげでいくばくかの収穫をうることができた」という自身の経験を語る言葉が「国境にとらわれながら、とらわれることによって逆に脱出をこころみる」という「国境病」の原理の説明と類似していることには注目すべきだろう。

こうした考察を経て、安部が東欧旅行で獲得した問題意識、それはまさしく〈国境〉とは何か、というものであった。鳥羽耕史[14]が指摘するように、安部は『東欧を行く』の中で「作家大会の名称と文章の導入以外には、「チェコスロヴァキヤ」という呼称を全く使っていない」のであり、「安部がここでいう「国境」とは、チェコスロヴァキヤという政治上の国家（ステイト）よりも、チェコ人、スロヴァキヤ人、あるいはジプシーという民族集団（ナショナリティ）に関するものなのである」。そ

の上で鳥羽は「安部のいう「国境病」とは、政治上の国境を支持する国家（ステイト）に対し、民族集団（ナショナリティ）による「国境」を擁護する姿勢のことなのである」と論じている。

ただし、安部はこの「政治上の国境」を全く切り捨てているというわけではない。むしろ、この二つの〈境界〉、制度上の国境と民族単位の国境がどのような関係を結びうるのか、という点にこそ関心を向けていたと考えられる。それを示唆するのが、次のような記述だ。

> 鉄のカーテンは、社会主義国と資本主義国のあいだより、むしろ社会主義国と人民民主主義国同志のあいだにはりめぐらされていたのではないかと、疑ってみたくなったほどである。新しい社会主義諸国間の関係は、もっと大衆のエネルギーを基礎にした、真の国際主義的立場にたつものでなければならぬだろう。[15]

安部は、冷戦構造の象徴である「鉄のカーテン」という〈境界〉を、社会主義国という〈内部〉にこそ見出していく。[16] それは同時に「新しい社会主義諸国間の関係」を安部に期待させるものでもあるわけで、いわば〈境界〉の変容を示唆するものだと考えられる。ここで安部は「疑ってみたくなった」と留保を含んだ表現を用いているが、社会主義陣営、とりわけソ連と東欧諸国との間にある〈境界〉を確実に発見している。それは『東欧を行く』の中で繰り返し述べられる「ポズナン暴動」を「はげしい前進にともなう震動のようなもの」とする評価、ハンガリー動乱を「革命的な行動」とした上で「仮に暴動というような形でであれ、可能にした人民のエネルギーと、社会主義思想の力とは、やはり正当に評価してもいいのではあるまいか」[17]とする判断、そしてチェコに対する次のような期待からも明らかだろう。

> 私が見ていながら見えないでいたそれら真にチェコらしい独自性は、自覚されていようといまいと、そのロシア的なもののアナロジーによる逸脱に対決し、そこからのがれでようとする、動きはじめた大衆のエネルギーにほかならなかったのである。

安部は東欧諸国の「大衆のエネルギー」に可能性を見出す。それは「ロシア的なものと社会主義的なものの混同」とそれを東欧諸国に押し付ける「ソ連の誤謬」を正すものとして、「国際共産主義の発展」に寄与するものとして期待されている。こういった「大衆のエネルギー」が、「ロシア的なもののアナロジーによる逸脱に対決し、そこからのがれでようとする」ものだと説明されていることは重要な意味を持つ。この文言もまた、「国境にとらわれながら、とら

われることによって逆に脱出をこころみる」という「国境病」の説明と類似しているからである。つまり、こういった「大衆のエネルギー」もまた、ソ連と東欧諸国の〈国境〉によって生み出された可能性が認識されているのである。安部が東欧旅行、そして『東欧を行く』の中で獲得した最大の成果とは、こうした〈境界〉が自明のものではなく、民族間、国家間の関係を変容させうる流動性を備えているということの発見にあったのである。

以上のような東欧をめぐる経験は「鉛の卵」にも影響を与えていると考えられる。第一には両者ともに〈境界〉に関する問題意識を有しているという共通点があるが、それぞればかりではなく、より具体的な表現のレベルにおいても類似した語句や描写が見られるのである。『東欧を行く』中の、プラハの街並みを目にした安部の感想を引用する。

しかし全体としてなにか納得しかねるものがあった。ぜんぶがあまりにも平穏で秩序正しく、グラフ雑誌に出ている短いきまり文句をそのまま絵にしたような場面が多すぎた。／たしかに発展はしているのだが、社会主義建設のエネルギーを感じさせるというより、むしろ社会主義経済学の教科書を図解したような静的な印象のほうが強い。革命的なものよりも伝統的なものが、矛盾より秩序が、支配的だった。

安部がここで強調するのは、「グラフ雑誌」そのままのような「静的な印象」であり、「伝統的なもの」や「秩序」の支配する空間である。この短文の中に「秩序」という語が二度用いられている点は重要である。なぜなら、すでに確認したように、緑色人も「秩序を愛している」人種として強調されているからである。加えて、緑色人街の街並みは「単調なくりかえし」であり、「なんの変化もおこらない」ものであるのだが、これはスロバキアの街並みの「静かすぎる、なにもかにもがあまりに静かすぎた。私は同じところをいつまでもぐるぐる廻っているような錯覚におそわれる」といった記述や、プラハの「うねうねとした狭い石畳の道がひっそりとした高い石壁にそってどこまでも続き」といった描写にも通じる。つまり、緑色人やその居住区の描写に際して、『東欧を行く』の中で描き出した東欧の街並みの印象を安部が重ね合わせた可能性があるのだ。

もちろん、だからといって緑色人がチェコを寓意している、といったことを主張したいのではない。緑色人はチェコに期待されるような「大衆のエネルギー」を持つ存在としては描かれていないからだ。ここで重要なのは、こうした東欧旅行を経て得た〈境界〉の問題意識を、「鉛の卵」に

おいて別の角度から追求した可能性を指摘することであろう。すでに確認したような「鉛の卵」における「高い塀」の両義性や、そこに独自の意味を発見する緑色人のありようは、東欧旅行で得た〈国境〉への問題意識に根ざしたものだと考えられるが、安部はあくまでも両者を同一のものとはしなかった。むしろ、社会主義国の内部にさえ〈境界〉を発見した安部は、〈境界〉そのものの多面的な可能性を追求したのではなかったか。その具体的な実践として、「鉛の卵」における「高い塀」とそれに接する緑色人、現代人のありようを描き出したのである。

五、おわりに

見てきたように、「鉛の卵」は〈境界〉を独自に意味づけていくという手段によって強大な支配者に対抗する弱者の姿勢を描いた小説だといえる。「高い塀」は緑色人、現代人それぞれに異なった意味づけを誘発する、いわば触媒のような機能を有している。こういった〈境界〉の可能性を追求した点に、本作の特異性があると言えるだろう。そして、以上の問題意識が、東欧をめぐる状況に対する作家の発想と共通点があることも確認した。安部は同時期に「周囲を国境で囲まれているってのは独特なものだと思ったね。僕らが想像する以上に、民族意識というものが、独特な形で働くらしい」[18]という発言もしており、「高い塀」に対峙する緑色人および現代人はどのように〈境界〉の意味を見出していくのか、ということに作家の関心の中心があったといえるだろう。

ただし、このような実験が必ずしも成功したわけではない。本作は〈境界〉の固定性をも同時に描き出している。「高い塀」に規定される彼らの関係は、ソ連と東欧の関係に見出された流動的な変化の可能性を秘めたものではなく、むしろ決定的な分断を内包するものであった。確かに緑色人は「高い塀」にある種の肯定的な価値づけを行い、独自の意味を持つ〈境界〉を発見してはいるが、その発想が現代人と緑色人の関係に影響を与えることはまずないだろう。こういった固定的な関係の中に、安部が東欧の状況に見出した「大衆のエネルギー」のような積極的な可能性を見出すのは困難であると言わざるを得ない。

とはいえ、安部は東欧の体験において初めて〈境界〉に関心を抱いたのではない。安部は「デンドロカカリヤ」(『表現』一九四九・八)や『壁』(月曜書房、一九五一・五)といったいわゆる〈変形譚〉の中で、人間とそうでないものとの隔たりという問題を度々扱っていた。「鉛の卵」に至って、

それまでに繰り返し用いられた文学的な創作方法と、社会的な関心とがテーマ上で直接的に結びついたのだとするならば、以後さらに『砂の女』（新潮社、一九六二・六）や「他人の顔」（『群像』一九六四・一）といった作品で追求されていくこととなる〈境界〉の問題と正面から向き合うこととなった安部文学の分水嶺を見出しうる。こういった視座の中に、「鉛の卵」再評価の契機も含まれているだろう。

【注】

（1）一九五七年七月から翌年末にかけての国際地球観測年は「地球上に発生する諸種の自然現象を全地球的規模のもとに国際的協力によって観測、調査する年」（永田武「国際地球観測年について」『生産研究』一九五五・八）であった。永田はこの期間の目標について、「この間のみは全く政治的イデオロギーを抜きにして、共通の問題を協同的に攻撃する。これは、人類と自然との対決であって、人間同志に関しては純学術的目的のための共通の広場である」と述べている。

（2）「米ソの人工衛星打上げ」（『世界週報』一九五八・一・一）などに詳しい。

（3）「新時代を画す人工衛星」（『毎日新聞』一九五七・一〇・六）では「人類待望の宇宙旅行へ出発する日も夢ではない」、「開幕した宇宙時代」（『朝日新聞』一九五七・一〇・一〇）は「世界じゅうをわきたたせたソ連の人工衛星はたしかに20世紀の科学の驚異です」などと報じている。

（4）「抽象的小説の問題」（『安部公房全集7』新潮社、一九九八・二、一五五頁。初出は『新日本文学』一九五七・五）以下、『安部公房全集』については『全集』と表記する。

（5）同時代において「サイエンス・フィクション」をＳＦと表記するのは必ずしも一般的ではなかったが、「科学小説」「空想小説」「サイエンス・フィクション」などの語が乱立し、それらがほぼ同じ意味で用いられていた。そのため本論では便宜上、同時代の「科学小説」「サイエンス・フィクション」などと指呼される作品群をまとめてＳＦと表記する。

（6）中村光夫は「文芸時評」（『読売新聞』一九五七・一〇・一七）のなかで「人工衛星時代にふさわしい小説」としつつ、「氏の小説にこれまでつきまとった晦渋（かいじゅう）さがきえるとともに、何か軽い通俗味がでてきた」と述べている。また、埴谷雄高は「文芸時評」（『図書新聞』一九五七・一一・二）のなかで「世界の設定」それ自体は称賛するものの、作品を構成する「小道具」が「ありあわせ」であることを指摘している。

（7）荒正人「未来小説について」（『東京新聞』一九五七・一〇

・三一）。荒はこの中で「私は大正の末に、「太陽」という雑誌で、冷凍された人間が、何万年後に生きかえるという筋の翻訳小説を読んだ記憶がある。だから「鉛の卵」は、未来小説に欠くことのできぬ独創的着想という点では、少し見劣りがする」と述べているが、荒が指摘している「翻訳小説」は、ジョン・マーチン・リーヒー作・佐野慶介訳「生ける死」（『太陽』一九二五・一～九）のことだと思われる。あらすじは、哺乳類を冬眠させる方法を発見した科学者フロンテナックが、かつて南極で氷の中に眠る少女を見たというリヴィングストン大佐とともに、南極の奥にある楽園を目指し、冒険の旅に出る、というものである。最終的に、氷の中で眠っていた少女はフロンテナックの手によって蘇生されることとなる。少女が氷漬けになったのは「幾百世紀の昔」とあることからも、「生ける死」は、荒の指摘に合致する。ただし、安部が「生ける死」を「鉛の卵」の典拠とした可能性は低く、むしろH・G・ウェルズ「タイム・マシン」（一八九五）を下敷きにしたと考えられる。なお、「タイム・マシン」との関連については加藤優「「未来」への抵抗――安部公房「鉛の卵」論――」（『近代文学　研究と資料　第二次』二〇一九・三）に詳しい。

（8）ここでいう「人類」が現代人を指していることには注意が必要だろう。現代人もまた古代人を自身の正統な祖先であるかどうかを確認したがっている存在であり、緑色人同様に古代人を通して自身の正統性を証明しようと試みているのだと考えられる。本作においては、この正統性というテーマも重要なものとして扱われている。

（9）なお、古代人が現代人の街に向かう「音のしない半透明の素晴らしい高速車」の中で「あたりかまわぬ大声で泣きはじめ」るのは、たとえ外見は変わらずとも古代人だと見なされている自身も緑色人同様「保存」の対象となるという未来を予測したからだと考えられる。

（10）本論において『東欧を行く――ハンガリア問題の背景』（以下『東欧を行く』と表記）の引用は全て『全集7』から行った。なお、本論における『東欧を行く』の引用箇所は「東ヨーロッパで考えたこと」（『知性』一九五六・九）および「日本共産党は世界の孤児だ――続・東ヨーロッパで考えたこと」（『知性』一九五六・一〇）を中心としているが、単行本化に際してこれらの文章は輻輳している。そのため、引用注はこれら二つの論文以外を初出にもつものなど特記すべき情報がある場合にのみ付すこととする。

（11）伊東孝之「東欧革命と非スターリン化」（木戸蓊・伊東孝之編『東欧現代史』有斐閣、一九八七・二、一九七頁）

(12) 関之はこの点について、「東欧動乱の最終的にして最大の要因はソ連が第二次大戦後、国際的な取極めと東欧諸国民の要請を無視して、ソ連の武力を背景として人民民主主義革命を強制し、コミュニズムの名の下に、植民地政策を強行したことに対する反発であり、はね返りであった」(『ハンガリー動乱を中心とする東欧問題の研究』経済往来社、一九五七・一一、四〇三頁)と指摘している。

(13) 『全集6』(新潮社、一九九八・一)の「作品ノート」四頁の記述を参照した。

(14) 鳥羽耕史「国境をめぐる思考――『東欧を行く』1956」(『運動体・安部公房』一葉社、二〇〇七・五、二一四〜二一五頁。初出は「「国境」の思考――安部公房とナショナリティ」『文藝と批評』一九九七・五)

(15) 『東欧を行く』、一〇五頁。

(16) なお、坂堅太は「チェコ人という民族集団」における男女間や世代間の対立を描く場面に着目した上で、「同質的だと思われた集団の中に〈境界〉を発見することで、矛盾・対立のエネルギーを取り出そうとする安部の認識が見てとれる」(「安部公房と「一九五六年・東欧」」『安部公房と「日本」――植民地/占領経験とナショナリズム――』和泉書院、二〇一六・一〇、一四〇頁。初出は「安部公房の東欧体験――「コミュニスト」の一九五六年」『日本文学』二〇一三・一二)と論じている。「社会主義国と人民民主主義国同志のあいだに〈境界〉を見出す安部の発想はこういった認識とも関係していると考えられる。

(17) 『東欧を行く』、一〇四頁。

(18) 座談会「チェコ作家大会とその周辺」(『全集6』、九三頁。初出は『美術批評』一九五六・八)